

第七次福井市総合計画審議会 専門部会 第1部会（第1回）

■日 時：平成27年6月18日（木）10:00～12:00

■場 所：福井市役所 別館4階 14C会議室

■出席者：別紙のとおり

■会議内容

1. 開会

司 会

ただいまより、福井市総合計画審議会第1回専門部会、社会基盤を担当いただきます第1部会を開催させていただきます。委員の皆様には、大変お忙しいところをご出席いただきまして、ありがとうございます。

まず最初に、総合政策室長の山田より、ごあいさつ申し上げます。

2. あいさつ

事務局（山田総合政策室長）

おはようございます。本日はお忙しいところを、総合計画の専門部会、第1部会にご出席いただきまして、ありがとうございます。場所がちょっと窮屈で、人口密度が高いかと思えますけれども、密度の高い議論を期待しているところでございます。

先日、審議会をやりまして、その際、私の方から第七次総合計画の策定にあたっての考え方を示させてもらったところでございます。基本的には、第六次総合計画を引き継いだかたちで七次を作りたいというような説明をしたかと思えます。その際、いろいろ厳しいご意見をたくさんいただきました。

ちょっと補足的に言わせてもらいますと、どうしても総合計画の性格上、1つは行政が関わっている仕事全体を網羅的に書き込まないといけないと。その総合計画の性格上、若干また抽象的になってしまうというところもあります。行政運営自体は、ずっとつながっていますので、どうしても六次を意識しながら七次を作っていくというようなことで、ああいう説明をさせていただいたところでございます。

とはいえ、総合計画は、福井市は計画期間を5年と考えていますので、今後の5年間についてどういうふうな方向性を示せばいいのかというところは、しっかりと出さないといけないと思えます。

今日は、各論の第1部会の議論になっていくかなと思うんですけども、最終的に、この前は将来都市像も変えない方向でとか、基本目標も変えない方向でとかいうことでお話をさせてもらいましたけれども、そのあたりも含めて、平成29年度から始まる第七次福井市総合計画はどうあるべきかと。そういうわかりやすい目標を作るべきではないかという議論も当然あると思えますので、またそんなところも今後いろいろ考えていただきたいと思えます。

本日は、基本的に委員さん同士でいろいろご議論いただきたいと思えますけれども、庁内の策定会議のメンバーと各担当所属も出席していますので、いろいろわからないところ

はどんどん質問していただければ結構かと思っておりますので、よろしくお願ひしたいと思ひます。

以上、簡単ですけど、ごあいさつとさせてもらひます。よろしくお願ひします。

司 会

引き続きまして、下川部会長様より、ごあいさつをいただきたいと思ひます。よろしくお願ひします。

下川部会長

皆さん、おはようございます。僭越ながら部会長を拝命いたしまして、及ばずではございますが頑張りたいと思っております。私たちの部会は、インフラといひまして、特に市民が生活をする基盤を、いかに持続的に構築していくかというのが重要な課題であります。そこら辺をしっかりと、皆さんと一緒に議論していきたいと思っております。

今日、皆さんにお願ひがあるんですが、行政の方々がお集まりいただひているんですけども、なるだけそこに質問などをあまりしないように、私たちの中で議論を集中していきたいなと思ひています。議事の運営にご協力いただきますよう、よろしくお願ひいたします。ありがとうございます。

3. 自己紹介

司 会

それでは、本日最初の会議となりますので、各委員の皆様から自己紹介をお願いしたいと思ひます。恐れ入りますが、大森委員さんの方から順次お願ひします。

大森委員

私は大森と申します。今は合併しましたけれども、元美山町からまいっております。集落支援ということで選出されたと思うんですけども、私のところは、小さい集落が点在してありまして、ほとんど限界集落に近いところなんですけども、そういうところで集落支援をしておるんですけども、ひとつ、よろしくお願ひいたします。

栗原委員

公募委員の栗原哲朗といひます。よろしくお願ひいたします。

町井副部会長

福井市自治会連合会の会長を拝命しております、町井でございます。どうぞよろしくお願ひします。

櫻井委員

福井市越廼地区で、地域おこし協力隊ということで活動させてもらっています、櫻井英佑といひます。よろしくお願ひします。

高島委員

私も公募委員で、福井工業大学の工学部で、下川先生のゼミで今活動しています。よろしくお願ひします。

堀川委員

堀川秀樹と申します。ただいま、市議会議員を務めております。中山間地と中心市街地をつなげるということ、今回テーマに考えてみたいと思ひます。よろしくお願ひします。

司 会

ありがとうございました。

それでは、続きまして、庁内の方で策定会議、各部局の次長で構成しておりますが、この部会に関係します部局の次長が出席しておりますので、各部局の次長は自己紹介をお願いしたいと思います。都市戦略部の方から順番に。

事務局（三谷都市戦略部次長）

都市戦略部の三谷でございます。どうぞ、よろしくお願いいたします。

事務局（倉商工労働部次長）

商工労働部次長の倉です。よろしくお願いいたします。

事務局（渡辺農林水産部次長）

農林水産部次長の渡辺と申します。よろしくお願いいたします。

事務局（竹内建設部次長）

建設部次長の竹内です。よろしくお願いいたします。

事務局（高間下水道部次長）

下水道部次長の高間です。よろしくお願いいたします。

事務局（坂口企業局次長）

企業局次長の坂口でございます。よろしくお願いいたします。

4. 審議

基本目標1「みんなが快適に暮らすまち」について

【資料】・第七次福井市総合計画（素案）

・人口構造 および 転入・転出に関する追加資料

司 会

それでは、審議の方に入っていきたいと思います。これからの進行につきましては、下川部会長をお願いしたいと思います。よろしくお願いいたします。

下川部会長

冒頭で、山田室長の方から、総合計画の性質についてお話があったと思います。もう一度ちょっと振り返りますと、これまで福井市は総合計画というものは、長期的なスパンでまちをつくっていかうということで、10年スパンで確か総合計画というものを策定していたと思います。それが第六次総合計画で5年間、第七次総合計画で5年間。つまり、六と七というのは併せて10年ということでもあります。

総合計画の性質上、そんなにころころ大きな政策を変えて、継ぎはぎのようにまちをつくっていくというもおかしいことですから、ある程度長期的な展望でまちをつくり込んでいくという考え方は、これはもう大切なことだろうと思います。そういう意味で、六を引き継ぎながら七を考えていくというのは極めて自然なことでありまして。ですから、基本は六だろうなと思います。

そうは言いながらも、一方で時代の流れというものもありますし、先ほど堀川さんがおっしゃったように、六次でフォローしきれていない部分もあるかと思っています。そういったところを、今日は皆さんと一緒に、六次をもう一回振り返りながら七次に向けて考えたい

と思います。

特に皆さん、第六次総合計画はお手元にお持ちでしょうか。お持ちでしたら開いていただきたいのですが。

この24、25ページに、第六次福井市総合計画の体系図というのがあるんですが、その一番左側の緑色の「みんなが快適に暮らすまち」という、こういうメニューが六次にあったと。

政策、施策というものが分かれていて、政策で5つのものが用意されていたと。皆さんにすでに配られているこちらを見ると、この中身が少し整理されていまして。これですね、これをちょっと見比べてみましょう。六次と七次を見比べてみたいと思うんですが。

六次で5つあった政策が、七次では、今のところ原案として4つになっている。つまり、何か減っているということなんですが、よく見てみると、これは実は減っているのではなく融合しているんですね。六次を基本に、ちょっと見ていきたいと思うんですが、六次で「都市としての魅力を高め交流しやすいまちをつくる」という、この緑色の政策があるんですが、これはそのまま第七次では「県都としての魅力を高め交流しやすいまちをつくる」というように、そのままスライドしてきています。

次に、緑色の「暮らしを支える社会基盤の整ったまちをつくる」という部分では、これを見ますと、社会基盤の整ったまちをつくるということなので、ちょっと言い方は変わっているんですが、「次世代につなぐ安全な社会基盤が整ったまちをつくる」というような言い方に、少しニュアンスは変えられています。

六次をもう1回見てみますと、緑色の「生活排水による水質汚濁負荷の少ないまちをつくる」という部分は、七次では「生活排水を適切に処理し良好な水環境を保つまちをつくる」。

六次で緑色、「環境にやさしい都市ガスを安全に安定供給するまちをつくる」という部分は、次の「暮らしに快適な都市ガス」という部分に引き継がれていますし、第六次の緑色の一番右側なんですが、「安全でおいしい水を安定供給するまちをつくる」という部分も、さっきの都市ガスと併せて、七次では「暮らしに快適な都市ガス、安全でおいしい水を安定供給するまちをつくる」という具合に融合されています。つまり、六次構想で作られたものが、現在、そのままスライドされている状況であります。

今日、皆さんにお考えいただきたいのは、実はある程度、先をちょっと見越して、最終的にこの政策、施策という部分を私たちが作り上げていくわけなんですが、まず最初に今日は政策に特化して、大きいところをまずみんなで議論をして、そして議論が進んで、また次回かその先になるかもしれませんが、そして施策の方に進んでいきたいなと思っております。

そういうことで、今日はみんなで政策についてちょっとお話をしていきたいなと思うんですが、何か宿題をお持ち帰りになられて、何か準備しておられる方とかおられますか。おられたら、ご発言をお願いしたいんですが、いかがでしょうか。

先ほど堀川さん、何かおっしゃっていましたが、中山間地域と中心市街地をつなげるというようなことを。

堀川委員

いきなり来ましたね。

下川部会長

この際、言ってしまった方がいいんじゃないかなと。実は、私も同意見なんですよね。

ちょっとお考えをご披露していただいてもよろしいですか。

堀川委員

ある程度こう、詰めたかたちで描いているものはあるんですけども、そんなことを今言ってしまうと。

下川部会長

まあまあ、大変なことになりますね。

堀川委員

検討しなければいけないので、だいたい大枠な部分を申し上げると、県都としての魅力を高めるという意味で、現在県都として魅力がないということ。例えば今、新幹線なんか金沢に来ていますが、金沢は新幹線に合わせて少ない資源を大いに活用して、むしろそれを過大にお客様に提案をして、それですごい集客をつくっているように見えるんですけども。

逆に言うと、福井はそういった見えはしないけれども、素材はものすごくたくさんあるのに、それを生かしてないなと思います。その素材というのが、さっき僕は中山間地と申し上げましたけれども、農林水産、それをまちなかにつなげることによって、大きな魅力にしていきたいなと思っています。こんなところでいいですか。

下川部会長

ありがとうございます。そうすると今、堀川さんのおっしゃられたお話というのは、福井市が用意した原案を見ますと、はまるどころというのがあるんですかね。

堀川委員

施策の中では、「にぎわいと魅力ある県都の顔をつくる」というところにはまってくるのかなど。政策では、「県都としての魅力を高め交流しやすいまちをつくる」ということだと思います。

下川部会長

政策としては、やはりそこに入ってくるという考え方ですね。

堀川委員

はい。

下川部会長

わかりました。ありがとうございます。そのほか、何かお考えをお示しいただければありがたいなと思うんですが。

櫻井さん、いかがです。難しいですね。

櫻井委員

そうですね。

下川部会長

越廼の方で今お仕事をされているとお伺いしたんですけど、越廼というと、言ってみれば、中山間地をさらに越えて海の方に行きますよね。中心部からずいぶん離れた場所ですよ。

そういったところで、人々が困っていることとか、あるいはこういったところが実は重

要なんだというところなんか、見えているんじゃないのかなと思うんですけど、そういうお話なんかをしていただくと、皆さんのご参考にもなるのかなと思いますけど、いかがでしょう。

櫻井委員

住んで半年ほどたつわけですけど、素直にちょっと不便だなと思うところがありますね。こういうところでもいいのかわからないですけど、取りあえずあんまり道がよくないというのがあって。もう少し海岸線まで真っすぐなだけでも、本当に、まちから海に出やすいのになと思ったりはするんですね。

下川部会長

まちから海に向かっていく基幹道路というか、メインの道路が、ぐねぐねぐねぐねしているということですかね。

櫻井委員

そうですね。

下川部会長

そういった交通面での問題が、やっぱりあるんじゃないのかということですかね。

櫻井委員

あと、駅前を見て思ったんですけど、今、恐竜をアピールしているんですけど。なので、もうちょっと海の方をアピールしてほしいなとは思いましたね。福井市は海にも面しているので。

下川部会長

そういうこともあるんですね。わかりました。ありがとうございます。また後から、いろいろお伺いしたいと思います。

大森さん、先ほど集落支援員をされているとお伺いしたんですが、具体的に言いますとどこですか。

大森委員

昔の美山町なんですけど。そこがとにかく人口の減少率がすごく高いものですから。県内でも合併以前は、池田に次ぐぐらい高齢化率が高かった町なんですけれども。現在、合併しましても、依然そういう流れといいますか、減る人数というのはもう下降の一途をたどっていますので。

ちょっとごめんなさい、長くなって申し訳ないですが。以前、6カ村が美山町に合併したんですが、そのときにも、小さい集落が、面積は広いわりには山で仕切られていまして、地域の交流というのはないものですから。うちのところは福井県の一番小さい村だったんですけども、そこが今は60軒ほどしかないんですよ、戸数でいえば。

でも、ほとんどお年寄りばかり。1つの集落なんかはもう90歳の方が、一人暮らしで7～8人おられますかね。ということで、ほとんどもう消滅集落になると思います。

そういう状況のところでございますので、美山町総合支所が、私の方へ見回りといいますか、そんなことでもしてもらえないかということで、ちょっと各集落とか家を回ったり、草刈りのお手伝いをしたりとか、そういうことで今やらせてもらっているんです。

皆さんのお話を聞きますと、もう今さらどこへも行きたくない、ここで生涯を閉じたいということで。もうほとんどが。息子さんたちも帰ってきませんし。都会に出ておりま

すし、福井市内にもいらっしゃる方はいらっしゃいますけど。ただ、土曜日とか日曜日にちょっと、少し作っている田んぼとか畑をお手伝いしに来てくれるというところが、まだ今のところは救いかなと思っているんですけどね。

下川部会長

なるほど。そこで生涯を閉じたいと、皆さん思われているんですね。

大森委員

そうです、そうです。どうしても動けなくなれば、施設とか病院とかそういうところへ入って生涯を閉じる方も多いんですけども、とにかく元気なんですわ。やっぱり、昔からそういう農作業とか、手とか足とか動かしてね。

下川部会長

足腰が強いんですね。

大森委員

そういう方で、腰なんか曲がっていますけど、意外と元気でやっているというのが現状ですね。

下川部会長

まちの人たち、何か困っていらっしゃるとか、何かありますか。

大森委員

やっぱりお年寄りですから、お医者さんへ時々行きたいんですけども、その交通の便というのは悪い。どうしてもとなれば、息子さんたちが近くにいれば来ますけど、そうできなきゃ。病院までの交通ですよ。

それと買い物ですね。買い物は今のところおかげさまで、福井市農協さんが週に1回ですけれども、移動販売車が回ってきてくれますので、それで何とか対応しているんですけど。

下川部会長

農協さんが車で移動販売をされて。それは週何回？

大森委員

1回です。最近、生協さんが1回回ってきている程度なんですけど。お年寄りは普通の野菜は作っておりますので、そんなんで生活して、元気で今のところはやっているんですけども。

下川部会長

ありがとうございます。

栗原さん、いかがでしょうか。何か、いろいろご持論をお持ちのような雰囲気漂わせているんですけど。もしよろしかったら、何か今回の政策に関わる部分でお願いします。

栗原委員

部会長の質問に答えていないと思うんですけど、ここ1～2日少し勉強して思ったことを、ちょっと申し上げさせていただきます。

公募で委員に立候補したんですけど、失敗したかなと、やめとけばよかったかなというのが正直な意見でして。それはなぜかという、これは第六次の計画をほぼ踏襲している

わけですね。第七次は、意見が非常に言いにくいんですね。六次から七次、ほぼ踏襲していて、将来都市像もあんまり変えにくいだろうと思いますし、基本目標も変えにくいだろうと思いますし。

だから、これは今、われわれがどんな意見をこれから述べていくかわかりませんが、われわれの意見でどこまで変えられるのかなという、ちょっと疑問というか、懸念といいますか、まあ、そういうことですね。

この将来都市像、「自然・活気・誇りにみちた 人が輝く かえりたくなるまち ふくい」ですね。これは、その都市像を設定した理由が、この最初に書かれていると思うんですけども。

最初に読んで、ちょっと違和感があったんですけど、特にこの「かえりたくなる」というところですね。趣旨を読んだら、ああ、なるほどなということなんですけど。でもやっぱりもういっぺん考えると、「かえりたくなる」というのが、県外に出ている人にとっては、あるいは福井市外の人にとっては、「かえりたくなる」というイメージも湧きやすいと思うんですけども、地元に住んでいるわれわれにとっては、「かえりたくなる」というのは、家に帰りたくなるのは当たり前だし、住んでいる地域に帰りたくなるのはもちろん当たり前で、帰りたくなかったら大変なことなので、何かちょっと違和感があるんですね。

だから、正直なところ、「かえりたくなるまち」というのを初めて聞いた人は、たぶんこの趣旨に書いてあるようなイメージでは捉えられないんじゃないかなと思うんですね。いっそのこと、過ごしたくなるとか、住みたくなるとか、もう少し単純な方がいいのかなという気もして。将来都市像についてはそう思いました。

この将来都市像の中で、「人が輝く」というのを私は非常に気に入っております。いいなと思うんですね、「人が輝く」というのは。「人が輝く」というのは、どういう状態になったときに一人ひとりが輝くのかということ、われわれ審議会委員みんなで、いっぺん考えたらいんじゃないかなと思うんですが。

それは第六次ですでに十分考えられているんでしたら、そのときに、その「輝く」というのがどういう状態になったときに人が本当に、みんな一人ひとり市民が輝くのかという話をされたなら、そこを説明していただくとありがたいなという気がするんです。

だから、「輝く」というのは本当に素晴らしいと思うんですね。これは裏を返せば、「輝く」というテーマを挙げた人々は、たぶん輝いている人もいるでしょうけれども、そうでない人、あえて言えば、もうひとつくすぶっている人、あるいは、くすぶってもいなくて、もうあえいでいる人ですね、そういう人もいるんだろうと思うんですね。平均的なところでくすぶっているのかなと。

輝いているというのは、何割いるのかなというのが非常に疑問なんです。これが100%輝いているんだとしたら、これは素晴らしい都市だと思うんですよ。よそのところからも移住してくるぐらい魅力があると思うんですね。だから、この「輝く」という意味がどういうことかということ、どうだったら福井市民が一人ひとり輝くのか。

読んでいくと、身障者とか高齢者が輝くというようなところが出てくるんですね、後の方に。じゃあ、それ以外の、健常者と言うと語弊がありますが、子どもたち、一人ひとりの小学生、中学生、高校生、大学生、若い大人たち、この人たちが輝く方法はどこかに書かれているのかということ、ちょっとはっきりは読み取れなかったんですけど。

だから高齢者が輝くのは、もちろんいいですけども、第二の青春ということでね。私も退職して、今第二の青春ということで、少しでも輝こうと頑張っているんですけども。

そういうことですね。

それからもう1つ、基本目標で4つあるんですけども、何となくわかるんですけども、これ、分けるのがなかなか難しいなって。政策のレベルになってくると、これは「みんなが快適に暮らすまち」に入れるべきなのか、その次のところへ入れるべきなのか、ちょっと私ももう1つ整理できないところがあるんですね。

だからそのあたりが、これは基本目標の立て方ですから、これでもいいのかもしれないんですけど、それぞれの基本目標の中で、われわれの「みんなが快適に暮らすまち」というところでは、その隣の「みんなで作る住みよいまち」とは違う、何を議論の対象にするのかというのが、何かもう1つ見えないところがあるんですけども。

私の理解では、われわれの部会は中心市街地、県都であるこの中心市街地ですね、「県都としての魅力を高め交流しやすいまちをつくる」だから、県都としての福井市ということですかね。福井市全体の魅力を高めるということですかね。

でも施策のところへ行くと、「にぎわいのある中心市街地をつくる」。だから中心市街地に焦点を当てているのか、中心市街地以外の周辺の、さっき堀川さんが言われたような中山間地とか、そういうところも、もちろん含んでいるんだと思うんですけど、ちょっとこれは中心市街地に焦点を当てているのかなど、この一番最初のところね。当然そうかもしれないですけど。

私が今この第1部会の中で興味があるのは、政策が5つ挙がっているんですけども、あとの3つというのは、こんなこと言うとあれなんですけど、あんまり興味ないですね。だってこれはどうしようもないというか、当たり前なことなので。上下水道とかエネルギーの供給、これはもうわれわれ市民にとっての生活基盤というか、生活インフラですよ。これはもう全国全ての市町村が当然、これは便利になるように努力すべきことなんでね。

下川部会長

だいたい栗原さんのお考えがわかってきました。

栗原委員

そうですか。

下川部会長

わかってきました。ありがとうございます。非常にいいお話を今、お伺いできたかなと思いますね。

実は私も、ちょっと同じことを考えていて。先ほども言いましたように、六次総と七次総というのは、ある程度連続性を持っていないといけない。やっぱり5年スパンでころころ変わるようなまちは、本当に危ないまちだと僕は思っています。ですから、総合計画というのは、ある程度長期的な視点でものを見ていかないといけないなと思っています。

その中で、都市ガスとか水、生活排水という部分については、これは今、達成度はどれぐらいか確認はしていないんですけど、これはもう継続的にやらないと、人々の生活の本当、一番重要な基盤なので、議論の余地もなかなか見いだせないかなと思っています。

そういう意味で、「県都としての魅力を高め交流しやすいまちをつくる」という部分に、みんなの関心が行ってしまうというのは、そうだろうとは思っているんですが。

県都といえば、中心市街地をどうしてもイメージしてしまうんですけども、今回そこを飛び越えて、中心というのは、堀川さんも言われたように中山間地域や、あるいは周辺地域とのつながりの中で中心部が存在しているわけでありまして。その議論が中心市街地に特化してしまうというのは、そこの周辺でお住まいの方々を、いわばほったらかしにし

ているような状態なので、そこはやっぱりしっかりと考えていかないといけないなと思っています。

ですから、六次総から七次総に引き継がれる部分というものもしっかりと押さえながら、七次総ではそういったもう少し広い視野で、福井市というものを見ていくことはできないかなと。ある意味ちょっと同じお考えになっておられるなと思って、ちょっとほっとしました。ありがとうございます。

高島さん、何かありましたら。いや、あるでしょうけど。お願いします。

高島委員

今のお話を伺っていて、まだ学生でわかっていない部分とかがたくさんあって、ちゃんとしたことが言えないかもしれないんですけど。最初のこの部分を見て、政策の部分の「県都」というところが強くて、中心市街地という部分が、その下のほかのところにどんどん出てきていて。

ということを見ると、駅中心の部分のことをいっぱい書かれていて、その周りの人とか、先生が最初に市民全員が幸せに暮らせる基盤と言われたので、そういう部分では、その中心となっている部分しか含まれていないというイメージを持つ作り方になっているのかなと思いました。

下川部会長

ありがとうございます。

そうですね。「県都としての魅力を高め交流しやすいまちをつくる」の下の4つの施策を見ますと、「誰もが使いやすい公共交通ネットワークを構築する」という部分や、「地域の特色と資源を活かした個性あるまちをつくる」という部分が、中心市街地以外でもその周辺地域でも拾える部分かなと思いはするんですけども、何となく施策のタイトルの付け方を見る限りでは、やはり中心市街地に特化しているようなイメージはありますね。

ただ、これは時代の流れに沿って、そこは考えていかないといけないと思うんですが、六次総のときには、中心市街地にある程度力を注入していかないといけない時期でもありました。でもこれからは、中心市街地とともに、周辺部にいかにして力を分けていくというんですか、そういうことをやっぱり僕らは考えていかないといけないんじゃないのかなと、そんなふうに思っています。

町井さん。

町井副部会長

今いろいろお話をお聞きしている中で、やはり県都、中心市街地に通じる基幹道路、それが昔はいわゆる東西が短く、南北がわりと福井の場合は長いんです、ずっと。今まで、東西がみんな途切れていたんです。

どこかそこへ行くと、もうその次が行けない。行き止めになっている。例えば極端に言うと、こっちの方ですね。国道から向こうへはもう行けない。遠回りしながら行くということで。最近では、みんなの意見がいろいろ出て、東西の道路も新設されて、今福井の真ん中に3本ありますかね、東西へずっと行けるのは。

今まで1本しかなかったんですよ。それが3本ぐらいになったということは、やっぱり市民の声が届いて、そういうようにまちの流れを変えるには、何をおいてもやっぱり道路だなということが。

それによって、県都がにぎわいを保つと。

例えば、私は鶉の公民館へちょっと行って話を聞いたんですけども、やっぱり年寄りの人が、われわれの地区と同じく相当パーセントが高いんですね。バスはあるけれども、行きたくてもなかなか、自分のところの家からそこへ行くまでが非常に遠いと。道は坂になったりするのです。

これは利用する者のぜいたくかもしれないけれども、やっぱりその辺を徐々に考えていかないと、まちうちの人間と郡部の人間との格差がだんだん広がるのではないかなと。それをきちんとしなければ。

下川部会長

そのとおりだと思います。

町井副部会長

やっぱり不平不満は、そういう毎日の生活の中から出てくるんだと思うので、それをできるだけ取り入れて。全部が全部取り入れるわけにいかないけれども、ある程度、可能な限りはしてあげることによってうまくいくんじゃないかなと、そう私は思います。

下川部会長

ありがとうございます。

堀川さん、先ほど農林水産というお話をちょっとさせていましたが、それをもう少しだけ具体的に、皆さんにお聞かせいただいてもらってもいいですか。

堀川委員

今日たまたま、越廼の方と美山の方がおみえになっていますが。

美山には、全国に誇れるそばのそば粉があるんですね。それを地元の方々がまちおこしというかたちで、そば道場も運営されているし、おいしいおそばを召し上がっていただくために努力をされている。いろんなところにも出て行ってらっしゃる。

そのおかげで、県外客がすごくたくさんおみえになっているんです。美山のごつつおさん亭というところで、そば道場もされているし、ご自分で打ったそばをそのまま召し上がっていただくこともできる。そういったまちおこしをされていて、成功されています。

一方、越廼の方だと、越廼の漁業組合の婦人部のおばちゃんたちが、自分たちでへしこを作ったりとか、発酵食品が多いんですけども、ご自分たちの漁師料理とかも含めて、いろんなところに出向いて紹介をされているんですね。この2つが今、交流をされているんです。美山に越廼の方が来られたりとか。

下川部会長

地域間交流ね。端から端ですね。

堀川委員

そうなんです。じゃあ、その真ん中に福井市が、両方とも福井市だけれども、中心市街地があっていいのではないかなと思うし。それをつなげることによって、例えばそれだけじゃなくて、池田のお餅とかもものすごく今評判がよくて売れているし。そういったものを発掘していくことも大事だなと思います。

下川部会長

そういうお考えですね。地域資源をまちづくりに生かすことによって、地域の魅力を高めて。その地域の魅力が高まることによって、人口流出を防いだり、あるいはIターン、Uターンとか、そういうものをちょっと増やしていったりというのは、まちづくりとして

はスタンダードな、王道な考え方で、非常に参考になるなと思ったんですが。

堀川委員

ただ、そこに一步踏み込まなくちゃいけないのは、Iターン、Uターンにつなげたいんですけれども、それをより多くのサラリーにつなげないと。お金を。

下川部会長

そのとおりですね。

堀川委員

だからそこをわれわれが、一ひねり、二ひねりして、新たなものもつくり上げていくということです。

下川部会長

要するにビジネスチャンスですよ、やっぱり。どういう具合に、地域産業というものをビジネスチャンスにつなげていけるようなかたちを、システムとしてつくれるかということですよ。

もう1回ちょっとお伺いしたいんですが、テクニカルな部分では、おそらくそれはソフト的な発想になってくるのかなと思うんですけど、ちょっとハード的な発想に切り替えたときに、そういった人々が今、生活をずっとしていかれているわけじゃないですか。そういう人たちにとって、栗原さんがおっしゃったように「人が輝く」という部分で考えたとき、どういった状態のハードになっていると、そういう人たちというのは持続的にそこで生活していけるんでしょうか。

ビジネスというのはいまベースにはなるんでしょうけれども、インフラの視点で考えると、どういったことが考えられるのかなと思って。

堀川委員

中山間地の耕作放棄地なんかは、国の外郭団体の機構が手を出して、そこで土地をまとめたら、それを借り上げて、第三者の企業とかに農業をしたらということで、それが今、功を奏している部分はあるんですが。本当の中山間地では、田んぼや畑がまとまらないので、そこからはちょっと遠ざかってしまっているんですね。ほったらかしになってしまっているという状況があつて。

下川部会長

それはちょっと問題ですね。

堀川委員

ですから、そういった部分のハードについては、逆にそれを逆手に取って、中山間地じゃないとできないことというのを見つけていきたいなと思いますし。幾つかその候補になるものはできてきていると思います。

下川部会長

ちょっと道がやや外れるかもしれませんが、これは皆さんにお伺いしたいんですけれども、確認のためにお伺いしたいんですが。

大森さん、田んぼとか畑とか、皆さんは今どうなさっているんですか。

大森委員

美山全体では結構あると思いますが、うちのところに限って言えば、うちは小さいとこ

ろですけれども、先ほどもちょっとお話しさせてもらったように、今のところは、息子さんが市内にいらっしゃれば、土日には耕作に来てくれますので、田んぼなんかは少し休耕田でも目立ちますけど、どうにかやっています。畑も、うちは地形的に少ないものですから、ぼちぼちお年寄りがやっているんですけれども。

やっぱり、今は鳥獣被害ですね。イノシシ。最近サルが出てきまして、集団でね。もうサルというのはどうしようも対応がないものですから、ちょっと困っている。現実で言えば、野菜なんかは買った方が一番いいんですよ。費用も掛かりませんし、手間もかかりませんし。

ただ、昔からのお年寄りというのは、その地域で、ずっと先祖から受け継いでいるものですから、少しでもその土地を有効に活用したいという、それだけでやっているだけですから。

下川部会長

手放すという選択肢はないんですね。

大森委員

ないですね、今のところ。ただ、もうしばらくすれば、もう全部が放棄地になりますからね。今、もうお年寄りばかりですから。

下川部会長

そうですね。

大森委員

そうすると、山が荒れますと、やっぱりどうしても川とかが氾濫したり。今のところは農地がある程度水なんかを保全していますけれども、その農地が荒れると、やっぱりどうしてもその下流のところの被害といいますか、そういうのが出てくるかなということをちょっと心配しています。

下川部会長

ありがとうございます。

櫻井さん、越廼でも、山並みに沿って、田んぼとか畑とかを栽培されているお年寄りの方々がだいぶ多いですよ。そういった方々というのは、今後どのように田んぼとか畑を考えていっているか。地元の人と接しているときに、そういう話を聞いたりとかはしないんですか。

櫻井委員

あまり、畑とか田んぼも、積極的にやっている人も今は少ないんじゃないかなと思います。昔の写真とかと比べても。昔、昭和何十年代ぐらいの写真とかだと、畑や田んぼが棚田とかで山肌に沿ってあったんですけど、今はもうほとんど放棄地になっていて。ほとんどやっている人は少ないのかなと思っています。みんな本当に、家庭菜園とか、そういうレベルでしかやってないのかなというイメージがありますね。

下川部会長

なるほど。ありがとうございます。

今、皆様からいろんなお話をちょっとお伺いしまして、やはり「都市としての魅力を高め交流しやすいまちをつくる」という部分を、少し集中的に議論していった方がいいかなと思っています。

高島さんが言われたように、中心市街地に特化した話になってしまいますと、今ほど言われた、中山間地域の方々というのをなかなかフォローしきれないところもあります。個別的な問題というのはあると思うんですが、そうではなく、もっと広い視点に立って、そうした周辺部の人たちも救えるような、そういうものがこの政策の中に入ってくるというだろうなと思います。

確かに気になるのは、この体系図の中の基本目標3のところに、「みんなが生き生きと働くまち」というところがあるんですが、そこに農林水産関係の話が盛り込まれていました。本道とすれば、こちらだろうなと思うんですけども。

皆様もご承知のように部会間調整、部会間の中で調整をいたしまして、それぞれうまく役割分担ができるような、そういった会を設けるというのを聞いておりました。そういったことも引くくめて、部会を飛び越えて議論になっても、僕は一向に構わないなと思っているんですね。

なぜならば、特に「都市の魅力を高め交流しやすいまちをつくる」という部分、この文言がいいかどうかというのは話は別ですが、こういった都市の魅力を高める、すなわちそこに人が住み続けられるような環境をつくっていくという部分は、全てにわたる問題なので、ある意味われわれの部会が、全体をちゃんと含み入れて政策を打ち出してあげないといけないだろうなと思っているんですね。

栗原さんがおっしゃったように、水とか都市とかそういった部分というのは、もうなかなか変えられるものではないですし、これを取っ払ってしまってどうするんだという話があります。ですから、こういったところはしっかりと六次総から引き継いでいただきながら、むしろ七次総では、この「県都としての魅力を高め交流しやすいまちをつくる」というところを、しっかりとわれわれの中でもう少し議論をして、膨らませていきたいなと思います。

今日の着地点なんですけど、会の最中に着地点の話をするのもおかしいんですが、絞り込むようなことはちょっとしないでおこうかなと思っています。なぜならば、絞り込んでしまうと部会間調整ができないからです。ある程度皆様からいろんなご意見を頂戴して、それを全てちょっと事務局の方に控えていただいて、それをもって1度、部会間の調整なんかできればいいかなと思っています。

そういうことで皆さん、あまり文言には縛られてほしくないんですが、この文言については、まだいくらでも変えられますので、そんな縛られてほしくないんですけど、今から「県都としての魅力を高め交流しやすいまちをつくる」という部分で、何か名案がある人がおありであれば、いろいろアドバイスを頂ければありがたいなと思います。よろしくお願いします。

それでは堀川さん。堀川さんが話ししてくれると、次の人が話をしやすくなるんで。今、農林水産に特化した話になっていますが、それを中山間地域という、もうちょっと大きい地域としてのくくりとして、職業としてのくくりではなく地域としてのくくりとして見た場合、中心部と周辺部というものは、ある程度バランスよく共存していかないといけないわけでしょう。その周辺部というのはこれからどうあるべきなのかという、あるべき論を、もしよろしかったらお示しいただければありがたいなと思います。

堀川委員

高齢化率は、やはり郊外の方が高くなっていく可能性はあると思います。

高齢者の方々にとっての仕事づくりであり、生きがいづくりであり、やりがいづくりであり、そういったものをつくり上げていかなくちゃいけないだろうなと思うんですが、

そこと今テーマにしている県都のにぎわいをつなげるにはどうしたらいいか。

お年寄りの今までの経験とか、それから技術とかを生かす方策はあると思うんですね。そのお年寄りが持っているものを、ちょっと掘り下げてみるができないかなと思います。

下川部会長

ご高齢の方にちょっと着目をして。なるほど。通常こういう議論になると、そういう中山間地域の魅力ある自然豊かな場所に、若者や子育て世代が住み着くような、そういう魅力を高めてくようなまちをイメージしてしまうんですが。

でも、そこにはすでに住んでいらっしゃるご高齢の方々が当然おられて、そういった人たちが、やっぱりしっかりと生活を維持できるような体制を整えていかななくてはいけないというようなお考えですかね。

堀川委員

資源の中にはいろいろなものがあって、例えば空き家も資源だと思います。その空き家は、先ほど大森さんのお話の中にもありましたけれども、若い者がまちの中に出ていってしまって家は空いている。でも、田んぼや畑の守りをしなきゃいけないので、戻ったときに家の掃除をしたりとか、仏壇に参ったりとかしているから、家はそのまま朽ちずに何とか保っているけれども、なかなか無理のある生活だと思います。

ですから、そういった空き家を有効に使う策を練ることも1つだと思いますし、それは全国的には、もう取り組んでいるところが幾つもあるので。

下川部会長

確かにそうですね。

堀川委員

県内だと、小浜なんかは先進的にやっているなと思いますけど。

下川部会長

そうですね。僕、ちょっとチェックをし漏れているんですが、空き家に関する施策といえますか、そういったものって、六次総ではどこで拾うことになっているのか。ちょっと事務局の方からお教えいただきたいんですが。

事務局（山田総合政策室長）

特に今、その六次総の中で、空き家対策みたいな感じのお話は明確には入っていないと思います。

下川部会長

なるほど。

事務局（山田総合政策室長）

ただ、その後うちも空き家条例とかをつくって。あるいは、「空き家バンク」という情報バンクなんかもありますし。空き家を有効に活用して、今後のそういう移住定住につなげていくというような話も、今後考えていくことは重要なところだと思いますので。六次にはないので、そういうご意見は確かに重要な視点だと思います。

下川部会長

重要ですね、ここら辺は。

堀川委員

空き家でも、中山間地の空き家とまちなかの空き家では違います。

事務局（山田総合政策室長）

いろいろありますね。

下川部会長

性格が違いますもんね。

堀川委員

別々にして。

事務局（山田総合政策室長）

危険空き家みたいな話もありますけど、ここは違う話の意味ですよ。市としてはどちらも取り組まないといけないですけど。

下川部会長

本当ですね。堀川さん、ありがとうございます。確かにそうだな、ちょっと見落としていたなという部分ですね。ありがとうございます。

栗原さん、中心市街地というのは、ある程度六次総で結構拾い上げているんですが、今までその周辺部という議論がなかなかできなかったと思うんですね。今、その周辺部に着目して、空き家とかそういった問題を堀川さんにご指摘していただいたんですが、他に何か周辺部で、こういったところに着目すべきなんじゃないのかということがおありであれば、何か一言いただきたいんですけど。

栗原委員

福井市の周辺部といっても、私はあまり詳しくないんですけど、いろいろ程度の差があるんだろうと思うんですね。ただ、高齢者が増えていって、空き家が増えていって、交通の便が悪くて、自然はわりとあるみたいなどころかなというイメージなんですけど。

例えば池田町ですね。池田町なんか今、木をテーマにした何か取り組みをしているかなと思うんですけど。森の中で遊ぶとか、木を使ったおもちゃを作って遊ぶとか、森の中のジャングルで子どもたちが体験するとか。何かそういうのを、池田町だけでなく、全国でそういう取り組みが結構されているんだろうと思うんですけど。

福井市の郊外というか周辺部なんかでも、里山的なところも結構あって、自然との共生というか、自然の中でプラス体験を子どもたちにさせるとか、非常にいいと思うんです、そういうことは。だから、なかなかその周辺部に若者が行って住むということは、急には難しいと思うんですね。

じゃあ、何が可能性あるかといったら、私が1つ思い付くのは、今はライフスタイルが変わりつつあると思うんですね。何が変わりつつあるかという、ワーク・ライフ・バランスをなるべく取って、そして仕事の時間を減らして、プライベートの時間を増やして、プライベートな時間の中で自分の趣味のことをするとか。家庭ともっと触れ合って、キャンプに行くとか、家の中で過ごすのももちろんいいし、家の中でみんなそろって食事するのももちろんいいんですけど。そういうライフスタイルが変わりつつある。

そして、団塊の世代なんか今どんどん増えていく。団塊の世代も、退職して。団塊の世代なんかは、田畑を耕したいという、農作業をしたいという人がいっぱいいるんですね。それで畑を借りている人もいっぱいいるんですよ。まちなかでも、空いている畑を。要するに、そういう人たちがそういう周辺のところに行って畑ができるとか。

もう1つアイデアとしては、私はロシアの人が言っていたのを覚えているんですけど。ロシアでは、自分の通常住んでいる家がありますね、それ以外に、時間があるときとか、土日とか休みのときはダーチャという、ロシア語なんですけど、ダーチャと呼ばれるそのものをみんな持っているというんですね。

それは何かというと、田舎の方に土地を持っていて、そこに、別荘とまではいかないんでしょうけど、ちょっと簡単な、ログハウスまでもいかないんでしょうけど、中でちょっと調理したり、休憩したりできるような、みんなそういう家を建てて。

そこで土日になると、家族で出掛けていって、農作物を育てたり。収穫したものをその小屋で、あるいはその外でバーベキューでもして食べたり。そういう暮らしをしているというんですね。

今、福井県民も、もうそういう生活を、田舎の方はしているかもしれないですけど、まちなかのアパートに住んでいる人とか、こういうまちなかに住んでいる人は、なかなかそういうことがしたくてもできない人があると思うんですね。だからそういうことで、土日なんかは、その周辺部に出掛けていって、その土地の人とも交流したり、そういうことができるといいなと思って。子どもにもいろんな体験がさせられるし、教育上もいいし。

下川部会長

自然を通じてということですよ。ありがとうございます。自然というキーワードも出てきましたね。非常にいいキーワードですね。ありがとうございます。

大森さん、実際美山の方で、特にここら辺をちょっと注目して、主として政策を考えていくべきじゃないのかというものが、もしすでに見つかっているのであれば、ちょっとお示しいただきたいんですが。何かございませんでしょうか。難しいですか。

大森委員

難しいですね。昔から美山というのは、こんなんですり訳ないですけど、大野と福井の中間地にありましたでしょう。だから、農業でもやっていこうという方もいらっしゃるんですけども。どうしても、やっぱり昔は高度成長だったものですから、どこかへ働きに行けば現金収入も得られるしということで、あんまり美山町では。池田町さんみたいに、中へ入ってしまえば、いろいろとそこで産業を持つこともあったでしょうけど。美山はもともとそんな感じで、大野へ働きに行ったり、福井へ出たりということで、地域の産業とかそういうのは、あんまり昔から育ってなかったんですね。

現在は、お年寄りがだんだん増えてきたんですけども。国道沿いというのは意外とあんまり人口も減少はしないんですけども、この両脇に入ったところが、ほとんど皆さん出てしまって、お年寄りばかりなんです。

そういうところは、今さらという気もしないではないですよ。自分たちの子どもでさえ帰ってこないのに、他から入ってきてくれるのかということもありますし。

例を見ますと、紹介して入ってきた人のうちに行っても、地元の方ともうまくコミュニケーションが取れないとか、そういう方もちょっといらっしゃるのはいらっしゃる。たぶんそういうものばかりを見ちゃっていますから。閉鎖的なところもあるんでしょうけど、うちのところによれば。どうしても、入ってくる人をあんまり歓迎しないということもあるんですね。

下川部会長

私は美山のことは詳しくないんですけど、美山の中で、人が寄り集まっている地区というのは当然あるんですね。

大森委員

ありますね。国道158号沿いですけども、ここはわりと集まっている。

下川部会長

帯のように集まって、円のようにではなく帯のように。

大森委員

そうです。あとは、山で仕切られておりまして、4カ村はずっと山の方にあるんです。

分散してあるものですから。それぞれにこう、道が入っているものですから、周回して道がないものですから、入っていったら、同じところを出てこないと駄目だという。

下川部会長

分散をしているということは、交わるどこかがあるんですよね。どこかから分散しているんですよね。

大森委員

もともと美山の役場があったところが、だいたい面積を見ると中心地になるんですけども。本当の人口の集中地というのはこちら側の、どちらかというと福井市寄りのところですね。そこが人口の集中しているところです。

下川部会長

集中しているところに移っていると。周辺の人たちというのは、やはり買い物に行こうとすると大変。その人の寄り集まっているところには、お店が当然ありますよね。

大森委員

最近、国道なんかもバイパスができたりしまして、その商業圏が変わってしましまして、ほとんどお店というのはなくなってしましましてね。現在あるのは、もうJAのマーケットと、そんな程度で。昔はたくさん小売店があったんですけども、ほとんど今はなくて、料理屋さんもほとんど、1軒あるかないかとなりました。買い物は、勤めている方はほとんど福井で買い物をして帰る。

お年寄りも、さっき言いましたように販売車が回ってくるという、そんな生活ですよね。ほとんど勤める人が多いですから、福井で買ってくるというのがパターンじゃないでしょうか。

大森委員

そうなんです。ありがとうございます。

町井さん、中心部の議論ではなくて、周辺部の議論をしたいと思っているんですけども、周辺部で特に気を付けて考えるべきところというのを、皆さんのお話をお聞きしながら何かお気づきなことは。

町井副部会長

やはりわれわれは中心部に生活していると、それは慣れということで、郡部の人との地域差というんですか、してはいけないと思いつつも、どうも毎日の生活の中でそれが出ているということで、いかに郡部と中心部との合流ができるか、そういうものが重要。

われわれは、やはり拠点といえば、地区では公民館が拠点になりますね。

公民館に近いところの方には、わりと集合力があるんですけども、2つ、3つ離れたところになると、なかなか出てこない。それをいかに集めるかということが、われわれ、現在の中で頭を悩ますところなんです。

同じ行事をやるにしても、なかなか魅力ある行事というのが、まちの中での魅力と郡部の人々の魅力との考え方に、若干ずれがあるから。相当昔とは変わってきましたけれども、まだ少し

あるかなという気がします。

自治会の者としては、その辺は十分考えながら、いろんな事業を施策の中に入れていかなきゃいかんなど。その辺は、ちょっと悩みという大げさですけども、一番問題は人を集めること。何にしても、頭が痛いところです。立派な事業をやっても人が集まってくれない。いかに人を集めるか、それぞれの委員さんにどうしたらいいだろうということで、私らは実際悩んでいるんです。

行事そのものは、みんな各地区からも見に来た人からの話を聞くと、いいことやるなと言う。いいことやるなと言いながら、やっぱりその辺のギャップが出てきて。そういう面で悩みが多いと。

下川部会長

それは大きな悩みですね。

町井副部会長

一番大きいんじゃないかなと思いますね。

下川部会長

これは、そうなんでしょうね、まちなかだけではなく、周辺部もやっぱり人が集まらないというか。昔の自治会機能が、もう高齢化してしまって、若い人が継いでくれないので崩壊してしまっているところもだいぶ多いんじゃないのかな。

象徴的なものは、福井市でも子ども会が少しずつ消滅していっているということも伺いますし、そういった面で、自治会なんかも相当構造的に維持していくのが難しくなっているんだろうなと思います。もともと生涯教育ということをベースに維持してきた公民館の役割なんかもずいぶんと、もうすでに需要がないんだろうと思いますし、変わらざるを得ないような状況にもなっているのかなと、そんなふうに思いました。

周辺部のことを考えると、わからないところがまだまだあるんですが、そこをもう少しだけ踏み込んで、皆さんと共有できたらいいなと思います。

自治会や公民館というのはインフラとは言えないかもしれませんが、自治会や公民館機能というのが、各地区を維持していく。私たちが議論しているのは、魅力を高め、交流しやすいまちをつくるということなので、地区ごとに考えていくと、それが公民館であったり、自治会であるわけなので、そういったところが今どういう状況なのかというのを、もう1回皆さんと共有したいなと思います。その辺に詳しい方、どなたが一番詳しいのかな、自治会のこととか公民館。

ちょっと待ってくださいよ。ちょっと大変失礼なことを、俺は今言ったんですか。うわ。町井さん、すいません。

町井副部会長

いえ、いえ。

下川部会長

本当、申し訳ない。

町井副部会長

今おっしゃるように、私の個人的な考え方では、公民館と自治会は協力していかないといけない。

下川部会長

自治会と公民館が協力していかないといけない。

町井副部長

なかなか地域の活性化ができないというのが現状なんです。公民館は公民館で、いわゆる指導、学習のその場で。それでいいんだということではなしに。やはり底辺にいるのは、みんないわゆる住民ですから。住民は全部自治会の中に、100%入っているわけでもないですけども、ほとんど100%に近く加入していますから。われわれは今、自治会の加入率の効率を図るために、もう1つ悩みがあるわけです。

下川部長

加入率ですか。

町井副部長

目標は、全住民登録の80%から85%を挙げているわけですね。だけれども実際は、80%にいかないんです。

その辺で、何をやるにも、先ほど申し上げましたように集まらなないと、人が集まってこない。「自治会というのは、何をそんなにすることがあるのか」と言われるんですけども、具体的にいろいろ説明をしても、なかなかぴんと理解をしてくれない。われわれの説明が悪いのかどうかしらないけれども、その辺の時代の相違というんですか、昔の人の考え方と、今の人の考え方と若干ずれがあつて。

下川部長

やっぱりそうなんです。堀川さん、そもそも公民館とか自治会というのは、これって確か法律か何かで定められているとかいうのはなかったでしたか。というのは、公民館とか自治会というのは、これからの地域にとってやっぱり必要なものなのではないでしょうか。

堀川委員

必要だと思います。公民館活動とか自治会活動が盛んなところは、お祭りがあつたり、お祭りイコール神様がいらっしゃるとういいますか、そういった神事があるから、それによって脈々とその先輩方から伝わる神事に対する思いが、普段の活動にも浸透してきている部分はあると思うんですけど。新興住宅地だと、神社があつても、その神社の祭りもなければ、そういったつながりがないとういいますか。ですから、その辺は1つ切り口かなとは思いますが、法律的な縛りというのは、ちょっと存じ上げないです。

下川部長

何かありませんでしたか。

町井副部長

自治会そのものは任意団体です。

下川部長

あれは任意団体ですか。

町井副部長

公民館は「教育法」なんかのあれですね、公民館は、法律に基づいてありますから。確か、間違いないと思います。われわれは任意団体ですから。

事務局（倉商工労働部次長）

「社会教育法」だつたと思います。

下川部長

「社会教育法」。

町井副部会長

任意団体ですから、強制加入はできないんです。「何でそんな、会に入らなあかんのや」と言われても答えようがない。

法人化しようという、県によってはあるんですけども、自治会を法人化したところもあるのはあるんです。福井では、それはちょっとなじまないということで、ずっと従来の任意団体でやって今日まできているわけです。

かといって、本当に何かあったときには地域住民の力が必要です。その元になるのが自治会なんです。自治会長さんが、がんと頭を上げてくれれば、どんなことがあってもみんな集まってくる。

「何の根拠もないのに何で強制的にそんなのをさせるんや」と言われることに、自治会が反論するのには、それではないんだと。やっぱり何かあったときに、一番力になるのは自治会だと。それを忘れて、こんなところで生活してもらっては困ると、私は極端に言うんです。

あなただけよければ、あとはどうでもいいというのは、それではここで生活していくわけにはいかん、おかしいんじゃないかと。とにかく自治会にまず入ってくださいと。その中で、年間を通じてのいろいろな仕事がそれぞれあります。

極端な話ですと、よく話が出てくる、ごみですね、毎日の。あのごみなんかも、例えば正規の人が、「捨てちゃ困るよ」と言ったら、捨てられない。本当、極端に言えばね。けれども、ぼいっとやってしまうわね。

身近な行事として、そういうことがお互いに助け合う1つの手段ですよと。入っていれば、指定された場所へ置いておけば、誰もどうも言いませんと。それを、入っていないあなたが、どこへでもぼいぼいと捨てるから、みんな愚痴が出るんだということ。いろいろな行事を自治会としてはやっています。

特に、今、堀川委員がおっしゃったように、祭りごとは、やっぱりまちを挙げての行事ですから、そういうので、一番いいのは、人と人のつながりがそういう場によって初めて生まれてくると。

それが、ややもすると、今はもう、ぱっと離れよう、離れようとする。くっつけよう、くっつけようとするのが、われわれなんです。来てくださいよ、来てくださいよ、こういう大きな行事があるので、みんなでやりましょうよというようにしているんですけど、なかなか口では簡単ですけども、現実が伴わない。中には、「何で、そんな、しつこいな」と怒られる場合もあるんです。

下川部会長

福井にもいろいろな地区があって、ご高齢の方々ばかりおられる地域というのは、自治会というものの参加率は高いんだろうと思うんですね。一方、若い人たちが住んでいたりと、あるいはよそから引っ越して来た人たちが集団で、新興住宅街で生活しているようなところは、なかなかひっつきにくいというのはあるんでしょうね。

若者の視点で、自治会の話が出てきたと思うんですが、どう思いましたか。自治会は必要なんですか。

高島委員

実家が富山の方なんですけど、おじいちゃんたちも一緒に住んでいるので、おじいちゃんがそういうところに入って行って、そういう自治会で何か役員をしたりというのは、そういう姿を見ているので、あれなんですけど。

かといって、私の父の世代とかでそういうのをやっているかといったら、おじいちゃん

に任せっきりの部分もあるし、自治会とかそういうことで、どういう取り組みをしているのかということも、たぶん詳しく知らない部分も多いかなと思いますし。

なので、どんなことをどういうふうにやって、みんなの生活をよくするような活動をしてきているのが自治会なんだという認識がないというか、どういうことをやっているのか自分がわかっていないというのが大きいので、必要なかどうなのかということも聞かれても、どういうことをやっておられるのか知らなくて、任せっきりの部分が強いからわからないという感じです。

下川部会長

ということは、あなたにとってはそんなに必要ではないってということだよな。

高島委員

中身を知れば何かあるかもしれないけれども、普段生活をする中で今、地域の交流とかは必要だなという部分はあるんですけど、かといって、その団体とかそういう活動は知らないし、知る機会がなかったというか、知ろうと思ったことが少ないかなと思います。

下川部会長

櫻井さん、地域協力隊で越廼に入られて、自治会との接触なんかものすごく多いんだろうなと思うんですが、越廼の自治会というのは、あそこはまだ若い人たちが住んでいますよね、青年団として。

櫻井委員

そうですね、青年団とか。

下川部会長

そういう人たちというのは、しっかりと自治会の活動なんかはされているんですか。

櫻井委員

越廼に住んで半年ほどたって、僕は、ほかの地区と比べることができないので、積極的に参加しているのかしていないかというのは、比べることはできませんけど。

ただ、そういうイベントがあるたびに公民館とかで、そういう青年団であったり、自治会長が集まって会議はしています。僕もそういうところに顔を出して、顔と名前を覚えてもらったというのもあるので、越廼は積極的なのかなとは思いますがね。お祭りだったり、公民館の行事であったりというたびに、公民館でそういう集まって会議するので。

下川部会長

今の話を聞けば、越廼の自治会は何となくよさそうなイメージなんですけど、越廼の人口はどんどん減っていつているんですか。

今日は、人口に関する何か資料があったような気がするんですが。これは「人口構造および転入・転出に関する追加資料」というのを、福井市さんから用意していただいているんですが、福井市の人口推計というのが、転出・転入の話がありますね。これを見てもいいでしょうか。これは地域別には載っていないんですかね。

事務局（山田総合政策室長）

それぞれの福井市内の地域別というのは、この中にはないです。

下川部会長

ざっくりとなんですな。

事務局（山田総合政策室長）

全体というか、福井市が、どういう人たちが出ていくか、入ってきているのか、どの県に行っているのか、そういうことを整理しています。

下川部会長

ちょっと皆さんにご相談に乗っていただきたいのが、やはりどうしても頭から離れないのが、人口減少に対して、今回の七次総でわれわれに何ができるかというところをやっぱりしっかり考えていくべきか、それともそこはいったん置いて、今住んでいらっしゃる方々が十分生活していけるようなものを、私たちがしっかりと提案できればいいか、この2つ、どっちなんだろうなと思うんですけども。

栗原さん、どう思いますか、これ。

栗原委員

すみません、もう1回言っていただけますか。

下川部会長

今、住んでいらっしゃる方のことを考えて、いろいろ考えて政策に盛り込んでいくというのも当然重要なんですが、ちょっと気になっているのが、人口がどんどんこれから減少していくんですよね。特に周辺部から減少していくんです。そうした周辺部から減少していくことを、しっかりと重く受け止めて、第七次総合計画のわれわれの部門の政策に、そこまでちゃんと考えて盛り込んでいくべきなのか。

栗原委員

難しい問題ですけども。

もちろん、今生活している人のことも大事ですけど、やっぱり中期計画というか、こういう計画の中では、長期計画も、もちろんそうでしょうけど、その人口減少、少子化に対する対策というのは、当然考えていかなければならないと思いますね。

どこの地域も全国的に同じかもしれないですけど、何で少子化になってきたかというのは、学者の方がいろいろ分析していると思うんですけども、私なりに、当たり前みたいな意見かもしれないですけど、もうこうなるのは、少子化になってきたのは、ある意味当たり前といえば当たり前なんですよね。

なぜかという、やっぱり女性が、別に女性の悪口を言うわけじゃないですけど、昔に比べると高学歴化してますね。みんな大学やら大学院まで行く人もいますし。そして女性がキャリアを追及していますから、結婚よりも、まず自分の能力を磨いて、自分の能力を發揮させたいという、そっちの方へ行ってしまうわけですね。

どうしてもそうになると、就職したときに、やっぱり一人前になるまでは結婚しないぞみたいなのがあって、結局仕事を頑張っているともう35歳ぐらいになってしまうのかな。

下川部会長

そこはちょっとわからないですけど。

栗原委員

なる人が多いんだと思うんですよ。高学歴化とともに、やっぱり女性も男性と同じように頑張りたいと、仕事の面で。

下川部会長

まあ、いろんな人がいますからね。

栗原委員

そうすると結婚して、ましてや子どもが産まれたりしたらもう休まないと駄目。結局、休んだら、じゃあ、職場に戻れるかっていったら、今は多少戻れるところも増えたかもしれないけど、いろんな弊害が休んだことで出てくるわけですね。

だから、当然女性は、もう昔に比べたらそういう意味で稼げるし、自由な生活ができるし、別に男に頼らなくてもやっていけるという。それで幸福な生活ができるかという、それは価値観の問題ですから、幸福な生活ができるという人もいるでしょうけど、やっぱり本来は、結婚して、子どもを産んで、家庭を持ってというのが理想的な姿かなと思うんですね。

だからこれをやろうと思ったら、女性が高学歴化してキャリアを求めるのは、これはしようがないので、今言われているように、子どもが産みやすく、育てやすい環境をどうつくるかということですね。それは家庭の中でも、地域社会でも、企業の中でも、職場でも。特に職場だと思います。職場に頑張っていたかかないと駄目だと思って、女性を本当に大切にできる企業がもっと出てこない、絶対これは駄目だと思うんですよ。

下川部会長

今、ちょっと際どいお話もありながら、でも、最終的には、なるほどな、いい話だなと思って聞かせてもらったんですが。

高島さん、何か言いたいことがあるんだったら、私が聞きますけど。なければ別に、流していただいても。

高島委員

おばあちゃんたちの時代の婚期というか、結婚して子どもを産むというときから比べると、結婚しようと思う時期も、年々遅くなってきているのはそうだと思うし、女の人、大学に行って、そこから就職したら、もう二十数年とかある程度の年で社会人になって、そこからまたキャリアというか、せっかく入社したから2～3年はちゃんと働きたいと思うことは必然だと思います。その後に結婚して子どもを産むとなったら、どんどん遅れていくし、それに伴って子どもの人数も少なくなってきていることは、社会の流れとしてそうなっているなど感じることもあるんですけど。

みんながみんなそうじゃないという部分もあると思うんですけど、そういう流れが強くて、親たちの意見としても、やっぱり大学に行ったらちゃんと就職をして、少なくとも2～3年はちゃんと働いてほしいという考えもあるだろうし。でも中には、就職して、子どもができれば家に入りたいたいと考えている女性も多いだろうし。

けれども、今の夫婦で考えたときの収入的に、子どもを大学まで行かせたいと思ったら、だんなさんだけの収入に頼るのでは難しい部分があるという計算だったりという部分もあるのかなとも思うので。そう考えると難しいなと思うんですけど。

下川部会長

櫻井さん、難しいかもしれませんが、越廼にいて、人口減少という言葉が頭をよぎったりとかしますか。

櫻井委員

普段越廼にいても、本当に普段は若い人はまちなかにはいないです。越廼の中には本当にほとんどいないですね。漁師の人、高齢の方が多し。それもあるのか、今は漁師には、若い二十歳ぐらいのインドネシアの人たちが十何人か、出稼ぎというかいます。

下川部会長

漁師？

櫻井委員

ええ。漁をして生活をしているんですね。

ということは、それだけ今、若い人が、その世代の人が漁師を志していないのかとか、それだけ市内に、中心の方に仕事をしに行っているのかなというのは感じましたね。

下川部会長

大森さん、人口減少、高齢化、これはやっぱり、美山におられるともう直面している大きな課題なんですね。

大森委員

そうですね。美山全体ではなく、うちのところしかわからないもので申し訳ないんですけど、先ほどもちょっと結婚の話が出ましたけれども、結構若い人がちょっといるんですよ、家に。35～36の女の人も、男の人も。

だから、あの人たちが結婚してくれると、子どももできて、3世代同居で子育てもいいんじゃないかと。自然の中で。もちろん、うちの場合美山ですので、学校が統合されていますので、スクールバスもありますし、いいんじゃないかなと思って。親御さんにも言うんですね、どうや、いいかげんに結婚したらいいんじゃないと。「いや、言ってはいるんやけど」という言い方されるんですけど。

最近、どっちかというと皆さん仕事の方に重点を置かれまして、そういう家族とかそういうことを考えるお子さんというのは、だんだん減ってきているんじゃないかと思うんですけどね。

それと、僕たちも思うには、子どもにしても、親と一緒に同居してて、食事も全部してくれる、家事も全部してくれるんだから、結婚しないでいた方が楽じゃないかと。外から見てるとそんな感じも受けますので。いいかげんに、もう少し将来のことを考えてくれるといいかなと思います。個人なので、言えませんが。個人的には、そういうことをちょっと思っていますけどね。

下川部会長

なるほど。お願いします。

栗原委員

「人が輝く」というテーマがありましたでしょう。人が輝く中には、1つは女性が輝かないと駄目だと思うんですね。女性が輝くためには、やっぱり昔とは違って、学歴も身に付け、それを生かして、やりがいのある仕事にも就いてもらい、頑張ってもらえる社会にならないと駄目だと思うんですね。

結婚して、子育てにさらにつながっていくためには、さっき言ったようなことも必要ですし、北欧なんかはたぶんそうなんだろうが、福井市のまちなかに、育児休暇を取って、子どもを連れ歩いている男の姿が見えるようにならないと駄目なんだろうと思うんです。

だから女性にもっと輝いてほしいと思うんです。高島さんは輝いている。

下川部会長

フォローを入れていただいて、ありがとうございます。

皆さんからいろいろお話をお伺いしまして、そもそもこの時期に人口減少というものを頭から外して議論することは、やっぱりできないんだろうなと、そんなふうにも思います。

そもそも私たちが議論すべきことというのは、基本目標1の「みんなが快適に暮らすまち」という、インフラの部分であります。

いろんな話が出てきて、中心部の状況や、周辺部の状況、それを具体的にいろいろ今日お話を聞くことができたと思います。空き家の話や、公民館、自治会の話も出てきましたし、自然や、またひょっとすると自然に絡めて、歴史や伝統というような、そういったものも合わさって、地域の魅力というのはつくられていくんだろうなと思うんですが。

ここでもう一度、最後に皆さんにお伺いしていきたいことがあります。私たちはやはりインフラ部会の立場として、快適に暮らす、そういった人口減少というものを目の前にしながらも、さまざまな問題があるということをおぼえていながらも、それでもやはり、みんなが快適に暮らしていけるような地区であったり、田舎であったり、漁師町であったり、当然この中心部であったり、大和田のような商業地区であったり、そういったところが、全て皆さんが快適に暮らせるようにするには、いったいどうすればいいんだろうかということをおぼえて、これからみんなで話し合っていきたいと思うんですが。

お気付きのように、都市ガスとか、水とか、生活排水という部分については、もう議論するまでもなく、これは第六次総を、そのまま僕は引き継げばいいだろうとは思っています。これは了解していただけますかね。もし問題があれば、また後からお願いいたします。

最後の議題なんですけど、私たちのまちの生活をしていくための基盤として、みんなが快適に暮らしていくということをおぼえて、どうすればできるんだろうかということをおぼえて、5分間ぐらい時間を取りますので、お考えをまとめていただいて、お1人ずつご発言をいただきたいと思ひます。よろしくお願ひします。

もう1回言ひます。中心部だけではなく、周辺部の人たちも引くくめて、みんなが快適に暮らすということをおぼえて、どうすれば実現できるだろうかということをおぼえて、正解はないと思ひますが、お1人お1人お考えをいただいて、ご発言をいただきたいと思ひます。5分間時間を取りたいと思ひますので、今の内にトイレとか行きたい方は、もしよかつたら行ってきてください。

当然、それぞれのお立場もあると思ひます。町井さんであれば、自治会の長でありますので、そのお立場になると思ひますし、それぞれのお立場で結構ですので、快適に暮らすというものを、どう実現するのかということ。大きな話をしていただければありがたいと思ひます。ワークショップみたいな感じになってきましたね。

～～～各委員検討時間 5分経過～～～

そろそろいかがでしょうか。それでは、高島さんから。言っておきますけど、これには正解はないと思ひます。

高島委員

今日は、またいろいろな話を聞かせていただいて、まちの人とか、周辺の人とか、いろいろな人が快適という観点、また考え方の違いという部分は大きいと思ひし、世代によつても、快適と思へることが違うだろうなということをおぼえて、またあらためて感じました。

その中で共通してくるとなると、交通の部分は快適の中で共通してくる部分なのかなということがあったので、交通の部分をもっと、車に乗ることもある程度の年になったら機会も減るだろうし、それこそ若い人たちだったら免許を持っていない高校生ぐらいの人たちも、使いやすいようなバスとか電車とかということも考えていつたら、もっと共通した部分を見て、みんなが快適という部分に少し近づくのかなということをおぼえました。

下川部会長

ありがとうございます。櫻井さん。どうでしょうか。

櫻井委員

僕も同じことを思って、交通面が大きいかと思えます。福井市は、10年ほど前ですか、合併して広がったわけで、海もあって、山もあってという、すごく面白い市にはなったんですけど、その海に行くまでの道がよくないとか、山も同じだと思うんですけど。

それが不便で、高齢の方も出づらかったりするし、車はどうしても必要で。1回越えまでバスで往復したこともあるんですけど、1時間ほどかかって。本数も少ないから、高校生とかはすごく大変な通学になるのかなとは思いました。そういうところの整備が一番重要なのかなと思えます。

下川部会長

ありがとうございます。それでは、堀川さん。お願いします。

堀川委員

言い出しっぺの育成。

下川部会長

言い出しっぺ？

堀川委員

行政的に言うと市民活動家の育成だと思うんですけども、ここでは言い出しっぺというふうについて、とにかくこれしよう、あれしようという、この指とまれという人を育成したいな。

下川部会長

人材育成ですか。

堀川委員

要は、今僕らがやっていることでもあるんですけど。まちづくりというキーワードで、自分たちに何ができる、何とか貢献したいと思っている若者がいっぱいいて。でも、俺はこれができる、私はこれができるよというものを持っているのに、それを生かすすべを知らない人たちに、「じゃあ、こっちへ集まっておいでよ」という呼び掛けのできる言い出しっぺが、出てくるといいなと思えます。

今、われわれがやっているのは、全員で190人ぐらいメンバーがいて、その中で、その言い出しっぺがこれやろうと言ったときに、「お、面白いな、それやろっさ」と言う人と、当日だけなら手伝えるわとか、全然興味ないわとか。興味がなくて、自分ではできないよという人は全然やらなくてもよくて、興味のある人だけがやればいいと思っています。でないと楽しくないので。

ですから、基本的に発信する人間は、楽しいことを発信するし、楽しいことに対して賛同できる者だけがやっていくと。でもメンバー的には、実質活動部隊が30人ぐらいいて、それに賛同する人間が190人の中から集まってくるというかたちなんですけど、それに参加する人は、月に1回いるかいなかかもしれないかもしれませんが、周りから見ていると、毎月というか毎週のように何かやっているというふうに見られる。

それが活気にもつながってくるし、数をたくさん打つので、失敗が9つあっても、一発当てれば、やっぱりこれまた、評価も高くなるしというようなことをずっとやっています。

その成果は幾つも現れていて、それを評価していただいている部分もあるんですが、そ

れを広げていきたいなど。ですから、今言い出しっぺがいるけれども、まったく新しいコミュニティとしての言い出しっぺの集まりをつくっていったらなど。成功事例があるので、その成功事例をまねしてみたらということと呼び掛けたいなどと思っています。

参考までに、今回取り組んでいますのは、先ほど来、話が出ています人口減少に対して、企業誘致とか、Iターン・Uターンというのを、今僕らが掲げても、時間もかかるし、お金も掛かるし、即効性はないので、じゃあ、即効性があることをどうしたらいいかとなると、全国の大学生の皆さんも、卒業して就職する人たちが、必ず農林水産業に、それも現場に携わる、それに行きたい、それをやってみたいという人たちは、たぶん何万人かいると思うんですね。

でも、それだけいるのに福井には来ない。来ないのは条件が悪いから。ですから日本一条件のいい場所にすれば、その人たちは福井を目指してくるので、その人たちと福井のまちなかをつなげる戦略を、今考えています。

下川部会長

なるほど。ありがとうございます。大森さん、お願いいたします。

大森委員

あまり何も思い付かないんですけど、私は地区で、お年寄りなんかと話していると、どうしてもやっぱり一人暮らしになると寂しいと言うんですね。話し相手が欲しいということで。僕らが行って、時々話はするんですけど。

ということはやっぱり、特に冬の間は、うちは雪が厳しいところですから出歩けないんですね。足腰が弱ったり、どうしてもテレビばかり見ていると。人との会話がなくなってしまうので、ある程度冬の間だけでもまとまって生活できる場所があるといいねという話は、お聞きするんですけど。

移住ということもあるのはありますけどね、財政的な支援もあると思うんですけど。とても、子どものところへ行っても生活できないですから、そういうことはまず無理ですからね。何かそういうことで、小さいコミュニティみたいな、冬季間だけでもそういうところに出してしまえば、お年寄りが集まって何かできるというか、そういうところがあるといいねという話はしているんです。

集落ごとに小さいのはあるんですよ。あるんですけど、もうお年寄りばかりですから、維持管理がなかなか無理ですので、できればそういう公共的なところで何かできるものがあるといいかなというふうには。

下川部会長

公共的な。

大森委員

そういうの。ある程度少しお金を出してでも、そういうものがあるといいねという話は、2、3お聞きすることはありますけどね。

下川部会長

例えば、道の駅のような。

大森委員

そんなんじゃないなくて、お年寄りだけがそこへ集まって、冬季間だけでも生活ができる空間。そうすれば、お年寄り同士お話ができるでしょう。1人でぼけっとしているよりもね。そういうところがあつたらいいねという話は、ちょっと出ましたけど。

下川部会長

ごめんなさい、もうちょっと具体的に教えてください。すごく大事だなと思って。それは、いったいどんなものがあれば。

大森委員

例えば、うちの場合だったら、近くに学校が空いているんです。廃校になっちゃった学校があるんですけど。

下川部会長

学校が空いていると。

大森委員

これはまだ、具体的には何もありませんけど、ただ、僕たちとのお年寄りと話していただけた問題ですけど、そういうところを利用できればと。いろいろと行政機関に問題はありますよ。ありますけれども、そういうところで冬期間だけでも生活できればいいねという話をちょっと。まだ比較的建物が新しいものですから。

下川部会長

それは面白いですね。

大森委員

という話がちょっと出ています。それをやったからといって、皆さんが集まってくるかどうかということは、またいろいろ問題はありますけど。そういうことも、お年寄りの冬の対策としていいかなというふうに。

下川部会長

なるほど。これは私たちの部会の実は大きな仕事として、だいたい公共施設がまとめてつくられた時期があって、今、35年ぐらいたとうとしている施設が結構あるんですね。そういった施設の更新、50年たったら壊すのか、それとも手を加えて維持していくのかとか、周辺部に分散しているものをなるべく中心に集めていって、お金が掛からないようにしていこうとか、2つあるものを1つにまとめてしまおうとか、こういったことを同時に考えていけないといけないんだろうなと思っているんですけども、まさにそういう話に近いなと思ってお伺いしていたんですが。

つまり、余っている公共ストックというか、施設も含めたストックというものを、いかに活用していけるかという、これはインフラ的な発想ですよ。これは大事ななと思いますよね。田舎でも幾つかありますもんね。そういうものを、地元の人たちがいかに使えるようにしていくかというのは、非常に面白いなと思いました。ありがとうございます。

栗原さん、お願いします。

栗原委員

先ほどから出ているように、中心市街地の魅力アップですね。今、いろいろ取り組んでおられますけれども、やっぱり中心市街地周辺に住んでいる人も、あるいは周辺部に住んでいる人も、中心市街地に出てきて交流できるような、各界各層いろいろな人が交流できたり、楽しめる中心市街地です。

若者対象だけじゃなくて、あるいは観光客だけに配慮したまちではなくて、地元住民が楽しめて、魅力あり、住みたいと思えるような、行きたいと思えるような中心市街地だったら、それは観光対策を何もしなくても観光客は来るんであって、観光対策が先にあるんじゃないなくて、住民が本当に魅力を感じる、交流したくなるような中心市街地を、一刻も早

く整備していただきたいと思っています。

今、だんだんそういう方向で、少しずつ目に見えるようなかたちで進んできているので、私はうれしく思っているんですけど。できれば、しつこいようですけど、若者だけを意識したんじゃなくて、高齢者も、男性も女性も楽しめる、そういう魅力あるまちづくりが大事だろうと思います。

それをしたうえで、そういうのがあれば、周辺部からも出てきたいと思う。自動車に乗ってくると、駐車料金が掛かるからうんぬんという人もいますけれども、できれば公共交通のインフラが、もう少し整備されていて。公共交通、インフラというのは、今後20年、30年とだんだん整備していったって、便利なかたちにしていったって、地方であっても、少しでも脱自動車の社会を目指していかないと駄目なんだろうなと思います。

それと、地域住民の協力体制をもっともっと強化していかないと。さっき公民館とか自治会という話がありましたけど、これは行政ではないけれども、コミュニティーで一番最初の単位なんですね。これがしっかり機能するまちでないと、やはり一人ひとり孤立した人が多いコミュニティーだったら、幸せになれないと思う、輝かないと思う。

人が輝くということを目指すのであれば、やっぱり地域コミュニティー、私は木田公民館なんですけど、公民館を中心に各小学校区単位でも何でもいいんですが、結束してもらい、さらに各自治会で頑張ってもらくと。公民館は頑張っているところが多いと思うんです、私のいる木田公民館も頑張っていますし、公民館は全般的に頑張っていると思うんです。

ただ自治会が、形骸化しているところがそれなりにあるんだろうと思います。昔に比べると自治会は、もう1年の持ち回りでやっているところがほとんどなんですね。結局、やりたくない人も、持ち回りで回ってきて、必要最小限のことしかしないんです。だから自治会がよくなるんです。必要最小限度、会費集めるとか、掃除とか、そんなことしかしない。できることはいっぱいあるんだけど、しない。

なぜしないかといったら、これは忙しいからです。皆さん、忙しい。それが第一の理由だと思うんです。忙しいからしない。ワーク・ライフ・バランスが崩れてしまっているから、もう忙し過ぎて、自治会の活動までは、なかなか手を出したくないという人が、ほとんどだろうと思うんですけど。やっぱりそこは、もっと進んで、地域住民が、自治会とかそういうコミュニティーづくりに参画したがるような、そういうお互いに助け合うような社会をつくっていかないと駄目だろうと思うんです。

今、18歳以上に選挙権が与えられますね。学校教育で選挙権、選挙に対する、政治に対する意識を植え付けるのも大事でしょうけど、一番大切なのは、地域住民が、高校生をどう育てるかだと思うんです。その一番いい方法は、少しでも自治会なり、公民館の活動に参加させることです。そのために学校も余裕を与えてほしいし、何かポイント制で、参加したらポイントがもらえるとか、そんなのもいいと思いますけど。とにかくそういう活動に参加しないと、地域の課題も何もわからないと思うんですね。選挙で選びようがないと思うんです。

だから、学校でそういう問題を植え付けるのもいいですけど、地域住民と共に、地域の課題の解決のために高校生を参加させる、18歳以上の人を参加させていくというのが大事なんだろうと思います。そして、子どもたちと高齢者の方々が、交流できるような場をいっばいつくるというか。交流というのは、高齢者はいっばい、知識、技能、ノウハウを持った人がいますから、子どもたちにいろいろな指導をしたり。

それは例えば、学校の横に保育園をつくるとか、保育園で、あるいは学校の中に、高齢者がどんどん協力に行くとか、開かれた学校を目指して、地域住民でつくる学校です。先

生だけで考えてつくる、閉ざされた学校ではなしに。

下川部会長

かなり具体的になってきましたね。

栗原委員

新しい、開かれた学校です。そこには、地域住民、若い人も、高校生も行ってもらってもいいと思うし、大学生も、高齢者も行ってもらってもいいし。そして地域の結束を高めていく。

それから、県外の外国人、都会人が集まってくるような取り組みができると思うんです。都会に住んでいる人や、都会に住んでいる外国人は、こういう福井なんかの田舎の暮らしというか、中山間地とか自然豊かなところで、1週間、2週間、夏休みを利用して暮らすなんていうのは、大変興味がある人は多いと思うんです。

だからそういうものに、空き家とかそういうものをどんどん、少しリニューアルするなり、リノベーションするなりして開放すれば、安い料金で、実費程度で開放すれば入ってくると思うんです。交流もできると思うんです。

ちょっと思い付いたのは、そんな程度ですけれど。

下川部会長

ありがとうございます。町井さん、よろしくお願いいたします。

町井副部会長

私は、今、堀川先生がおっしゃった人づくり、人材です。これはわれわれにとって、非常に大事な基本的なことだと思うんです。というのは、まちをおこすには、やはり中核になる人を育てないといけない。われわれは今、地域でそういうやり方をやっております。その下に集まるメンバーをさらに枝分かれさせて、そしてピラミッド方式でまちおこしをやる。

今、欠けているのは、どうしても真ん中の年代層が、若干うまくいかないんですけども。そのいかない中でも、その中でのリーダーを養成する。そして一番トップのリーダーの中に入れてしまうわけですね。

私らのまちおこしには、いろんな事業があります。踊りとかいろいろありますけど、その中に必ず若手を入れるんです。若手の育成のために、リーダーの下に必ず参加させるということで、全体のまちおこしをやる。

下川部会長

素晴らしいですね。

町井副部会長

そうしないと、1回目はいいけれども、その人がいなくなったらがさっと誰もリーダーがいらない。私も、自分で言うのもおかしいんですけども、連合会長を10年ほどやらせていただいているんですが、まずリーダーそのものは、率先垂範型の人でないとこれは無理だと思うんです。途中でやめるような考え方でやると、なかなか事業そのものは継続性がなくなってくるということで、やっぱりものを興したときに、継続性がない事業は、変なもんです。誰も助けてくれる者がいない。

そういう意味で、リーダーになる人は、本当に地域の真上に立つ人。出しゃばった言い方ですけども、人間的にしっかりした人と、それからもちろんいろんな面で人物評価されている人。それから、私が言うように率先垂範型の人。また、人を引っ張ってこられる人材。そういうようなものを総合した人が、一番地域のトップにいながら、そして下の人

づくりをやっていくと。

それには、まず委員会なら委員会を設けて、その委員会の中でも、さらに若手のホープを引っ張ってあげて、全体でやるようにというのが、自分の経験から見ていいのではないかなと。

というのは、もう1つ、私は今、マイタウン・パトロール隊長の隊長という名前を頂いていて。これはまちの防災です。災害防災の中での、簡単に言うと昔でいう夜回りです。それを平成14年に福井県の条例でやって、今日まで私はずっとやっているんですけども。

その中で一番やっているのは、今申しました、誰かが1人引っ張ってこないと、あとはなかなか地域の人に来てくれないですね。その中で実績を積みながら、今日まで私がきているのは、そういう実績があったからこそ、みんなが姿を見てくれるから、その姿を見られているから、余計もう、張り切るといっておかしいですけども、自分でやっている。

今日まで12年間ですか、今でも雨風は除いて、今年から、先だってから日曜日だけ休もうやと、1週間に1日は休暇を取ろうということで、先週から日曜日を休みにして、毎日やるのが自分の健康の一環でもあって、地域のそういう活動の中の一環でもあるということ。

そういうことで、実際は私は旭地区ですが、78の自治会があるんですが、ほとんど夜回りのそういうことをやってきたんです。やってきたけれども、なかなか続かないというのが現状で、だんだん年がいくもんですから、毎晩毎晩そんなに歩けないんでね。

それで若い人を、私らの場合はですよ、自分を支えてくれる人をしっかりつかまえて、毎晩やっているという。

各地区でも、1週間に1回はやってくれています。私らの78自治会の中で、最初に、自分の町内だけでいいですよと、10メートル、20メートル回りでもいいから、それをお互いにやってください。毎日やらなくてもいいですよと、週に1回でもいいですから、自分の地域は自分で守ってくださいというのが基本的な考え方で、今日までやってきていますので。

晩になると、だいたい私らは8時から9時10分ぐらいで家に戻るんです。自分も十何年間やってきて、一番うれしかったのは、地域の人が、私らが鳴らして回っていると、玄関に出てきて「ご苦労さまです」と言うその声が聞かれる。それが非常に、われわれこの仕事をしてよかったなど。それはわれわれの自治会での会合の席で、いつも言うんです。

やっぱり一生懸命やっている人の姿というのは、誰かが見ている。それを見本にして、みんなが集まってくれば、必ずそのまちは栄えるはずだ、安全が保たれるはずだから、ひとつみんな頼みますねというのが。私は健康な間はやっていこうということで、今心掛けてはおります。

やっぱり堀川先生がおっしゃったように、リーダーです。まちおこしするのも何をするにしても、リーダーをまず、人材育成が一番肝心だと思うんです。そんなことを、自分のやってきたことと、思っていることを申し上げたんです。

5. まとめ

下川部会長

ありがとうございます。

それでは、皆さんからいろいろなお話をいただきまして、私の方で簡単に、今後の進め方も引くくめて、皆さんにちょっと書き留めておいてほしいことを申し上げたいと思い

ます。次回の部会は、また後から事務局からお話があると思いますが、それに向けて皆さんに、宿題として持ち帰っていただきたいものがあります。

まず、中心部も中山間地域も引っくるめて、「交通」というキーワードを持ち帰っていただきたいなど。そして、「空き家」というキーワードも持ち帰っていただきたいと思います。あと、広くなる話ですが、「地域資源の活用」というキーワードも持ち帰っていただきたいと思います。その「地域資源の活用」には公共施設、先ほど大森さんがおっしゃったような、もう使われていない学校があるとか、そういう話もありますし、当然足羽川や足羽山、周辺部に行くともっと大きな自然があるんですが、そういったものも地域資源になるでしょうし、地元の方では、歴史的な、伝統的な、何かあるかもしれませんし、そんなもの引っくるめての地域資源なんですが、そういった地域資源の活用というものを、またお考えいただきたいなと思っています

もう一度言いますと、「交通」「空き家」「地域資源の活用」です。これを次回、皆さんと、しっかりお話をしていけたらいいなと思いますので、ご準備をお願いしたいと思ます。

それと、皆さんから、今日たくさんいただいた人材育成に関する事、また、自治体等組織の協力体制とか、取り組みに関する事、あと農林水産に関する事などは、ほかの部会のこともありますし、いったんこちらで預らせていただいて、部会間の調整の際に、こちら辺をどう扱えるかというのを議論したいと思ます。

今日、皆さんからいろいろお話を承りまして、われわれの部会としては、この「交通」「空き家」「地域資源の活用」というところで、議論を深めていきたいと思っております。私からは、以上とさせていただきますと思ます。

それでは、事務局に戻せばよろしいでしょうか。

6. 閉会

司 会

大変貴重なご意見をたくさんいただきまして、ありがとうございました。

それでは、次回の専門部会の日程について、ご連絡いたします。次回ですけれども、来月7月24日金曜日になりますけれども、13時30分より開催させていただきたいと思ます。会場につきましては、未定でございますので、後日あらためて正式なご通知を発送させていただきますので、日程確認の方をよろしくお願いいいたします。

以上で、第1回目の第1部会の会議を閉会いたします。長時間にわたりまして、どうもありがとうございました。

(以 上)

第七次福井市総合計画審議会 第1回専門部会 出席者名簿

第1部会 社会基盤分野

※委員50音順、敬称略

		氏 名	備 考	出欠
福井市総合計画審議会	部会長	下川 勇	福井工業大学 准教授	○
	副部会長	町井 廣	福井市自治会連合会 会長	○
	委員	大森 紀之	集落支援員	○
	委員	栗原 哲朗	公募委員	○
	委員	櫻井 英佑	地域おこし協力隊	○
	委員	高島 美空	公募委員	○
	委員	堀川 秀樹	福井市議会	○
市	総合計画策定会議	三谷 清	都市戦略部次長	○
		倉 美幸	商工労働部次長	○
		渡辺 知幸	農林水産部次長	○
		竹内 康則	建設部次長	○
		高間 光夫	下水道部次長	○
		坂口 定之	企業局次長	○
	事務局	山田 幾雄	総合政策室長	○
		山本 誠一	総合政策室副課長	○
		塩谷 靖喜	総合政策室主任	○
		山口 秀明	総合政策室主幹	○
		落合 大輔	総合政策室主査	○
		松田 佳恵	総合政策室主査	○